

## P-11 チェコ語の関係節における代名詞残留—直接目的語位置に着目して—

松山芳瑛

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

【要旨】本研究は、チェコ語において、関係節における主要部名詞が直接目的語である場合の代名詞残留に影響を与える条件及びそれらの条件間の序列を、定量的調査によって明らかにした。本研究ではコーパスを用いて871例の用例を収集し、主に次の3点を示した。用例における残留割合に基づき、1) チェコ語における諸条件が「主要部名詞の①有生性>②主格形と対格形の形態的同一性>③数>④性>⑤主節と関係節における格の合致の有無」の順に強く残留代名詞の有無に影響を与えることを明らかにした。2) 基本的に無生名詞は非残留関係節をとる一方、有生名詞では②~⑤の4つの条件の組み合わせにより残留割合に差が生じることを示し、先行研究の主張を精緻化した。さらに、個々の用例の分析に基づき、3) 関係節内の主語が無生物である場合に残留が起きやすいことを明らかにした。

### 1. はじめに

チェコ語<sup>1</sup>の関係節化には、特に口語やインフォーマルな書き言葉において、不変化の疑問代名詞 *co* “what” が用いられることがある (Šimík 2008: 6-7)。このタイプの関係節においては、主要部名詞の性・数・関係節における格を標示する残留代名詞 (3人称代名詞<sup>2</sup>) が観察される。チェコ語における残留代名詞の出現範囲は、他のスラヴ諸語と同様に、名詞句接近可能性階層「主語>直接目的語>斜格句」に合致しており、原則として、関係節における主要部名詞が主語の場合は残留が不可、斜格句の場合は残留が義務的となる (Philip 2012, Mendoza 2019)。一方、直接目的語 (対格名詞句) の場合、諸々の条件によって、残留代名詞が現れる場合 (1a) と現れない場合 (1b) がある。本研究が問題にするのは、直接目的語位置における代名詞残留に影響を与える条件である。

- (1) a. To je ten chlap, [co ho viděli  
DEM be.PRS.3SG DEM guy.MA.SG.NOM CO M.3SG.ACC.CLT see.PST.MA.PL  
v tramvaji].  
in streetcar.F.SG.LOC  
「これは彼らが路面電車の中で見た男だ。」
- b. To je ta kniha, [co viděli na stole].  
DEM be.PRS.3SG DEM book.F.SG.NOM CO see.PST.MA.PL on table.MI.SG.LOC  
「これは彼らが机の上で見た本だ。」 (Toman 1998: 310 に文字飾り・グロス・訳加筆)

なお、本研究では、関係節において代名詞が残留する現象のことを「代名詞残留」、残留する代名詞のことを「残留代名詞」と呼ぶ。

<sup>1</sup> チェコ語の名詞は7つの格 (主格、生格、与格、対格、呼格、前置格、造格) と単数・複数の区別を有する。名詞は、男性、女性、中性の3性を区別し、男性名詞はさらに有生性によって男性活動体名詞と男性不活動体名詞に区別される。基本的に、男性活動体名詞は有生物、男性不活動体名詞は無生物を表し、女性名詞、中性名詞は有生物、無生物いずれも表す。以上の内容は Short (1993: 465-470) に基づく。

<sup>2</sup> 3人称代名詞のうち、男性活動体/不活動体単数形と中性単数形は短形 (前接形) と長形の区別を有する (Short 1993: 470)。これらに関しては、基本的に短形が用いられる (本研究で得られたデータに基づく)。

## 2. 先行研究

### 2.1. スラヴ諸語における代名詞残留

スラヴ諸語の直接目的語位置における代名詞残留は次の2つの条件に左右される (Hladnik 2015)。

①**主要部名詞の主格形と対格形 (以下、主・対格形) の形態的一致**: 主要部名詞の主・対格形が形態的に同一でない場合、残留代名詞が必要となる (Hladnik 2015: 63-65)。なお、格変化を有するスラヴ語における格変化パターンには若干の相違が見られる。チェコ語では、**単数**では**男性活動体名詞**と**女性名詞**が、**複数**では**男性活動体名詞**のみが主・対格形を異にする (表1 太字部分)。

表1: チェコ語の代表的な格変化パターン (Short 1993: 465-468 に基づき作成)

SG				
	MA	MI	F	N
NOM	<b>chlap</b> (man)	hrad (castle)	<b>žena</b> (woman)	město (town)
ACC	<b>chlapa</b>	hrad	<b>ženu</b>	město
PL				
NOM	<b>chlapi</b>	hrady	ženy	města
ACC	<b>chlapy</b>	hrady	ženy	města

②**主節と関係節における主要部名詞の格 (以下、主関格) の合致**: 主関格が合致しない場合、残留代名詞が必要となる。

Hladnik (2015: 65-69) は、**主・対格形の方が主関格より優先される**と主張している。例えば (2) では、主要部名詞が主節では主格、関係節では対格となっており、主関格が合致していないにも関わらず、主要部名詞 *dijete* 「子供」(N.SG) の主・対格形が同一であるため、非残留が容認される。

(2) *Dijete* [što sam (ga) vidio] voli Ivu.  
 child.N.SG.NOM CO AUX.1SG N.3SG.ACC.CLT see.PST.M.SG love.PRS.3SG PN.ACC

「私が見た子供は Iva を愛している。」

(ボスニア・クロアチア・セルビア語, Hladnik 2015: 66 に文字飾り・グロス・訳加筆)

### 2.2. チェコ語における代名詞残留

チェコ語に関してコーパス調査を行った Čech and Šimík (2005) と Fried (2010) は、チェコ語において、主に以下の条件が直接目的語位置における代名詞残留に影響を与えると主張している。

①**主要部名詞の有生性**: 有生名詞、特に人間を表す名詞において残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005, Fried 2010)。

②**主要部名詞の性**: 男性活動体名詞、女性名詞で残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005)。Čech and Šimík (2005: 21) はこの理由を、人間の指示対象は主にこれらの名詞によって表されるためであるとしている。

③**主要部名詞の数**: 単数において残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005, Fried 2010)。Fried (2010: 23) は、残留関係節は有生性に関わらず単数名詞と共起しやすいと述べている。

④**主関格**: 主関格が合致しない場合に残留割合が高くなる (Čech and Šimík 2005: 22)。

### 3. まとめと問題提起

2章で挙げた条件の関係は以下の図に示す通りである(図1)。主・対格形を異にする男性活動体名詞と女性名詞(表1)において比較的残留が起きやすいことは、チェコ語においても主・対格形が効いており、形態的な対格標示の欠如を補うために残留が起きることを示唆している。Fried(2010:22-25)は、チェコ語の残留代名詞は、一般的に目的語になることが典型的でない名詞(有生物)や、指示可能性・個別性の度合いの高い名詞(有生物、単数)との共起傾向があることを示唆している。さらに、主関格が合致しないために関係節内の文法関係を理解する際の認知的負担(用語は王・プラシャント・堀江2005に基づく)が高い場合に、残留代名詞を用いた明示的な関係節が用いられやすくなると言える。

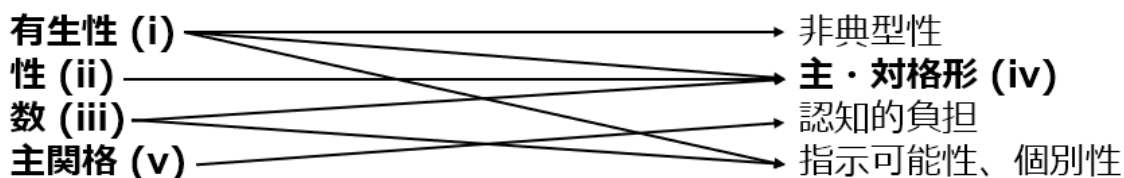


図1: チェコ語における条件の関係

(Hladnik 2015, Čech and Šimík 2005, Fried 2010, 王・プラシャント・堀江 2005 を基に作成)

一方、先行研究には、個々の条件が個別に記述されており、条件間の強さの関係が明らかでないという問題点がある。そこで本研究では、**(i) 有生性**、**(ii) 性**、**(iii) 数**、**(iv) 主・対格形**、**(v) 主関格**、の5つの条件に着目し、条件同士の働き方の比較を可能とする方法によって調査を行う。

### 4. 調査方法

本研究では、主にチェコ語国立コーパスの SYNverze 11 (以下、SYN11) を用いることとし、用例数が不足する場合のみ、チェコ語国立コーパスで公開されている Araneum Bohemicum Maximum verze 15.04 (3.20 G) (以下、ABM) を用いる<sup>3</sup>。以下の条件を組み合わせ、合計 24 通りの「名詞, co」の語連続を検索する。初版が 1980~2021 年であるテキストから、1 グループにつき 40 例を目標に用例を手作業で収集する<sup>4</sup>。ウェブ記事やブログ等から成る。SYN11 から用例を引用する場合はテキスト名とテキストジャンルを、ABM から引用する場合はウェブドメインと用例が収録された年月日を記載する。

- (1) 主要部名詞の有生性 A(人間)<sup>5</sup> / I
- (2) 主要部名詞の性 M / F / N
- (3) 主要部名詞の数 SG / PL
- (4) 主関格 合致 (対格) / 非合致 (主格)

<sup>3</sup> チェコ語国立コーパスは 1994 年に設立され、カレル大学哲学部のチェコ語国立コーパス研究所と理論・コンピュータ言語学研究所が中心となって運営している。SYN11 はフィクション、雑誌、新聞などから成り、現時点でおよそ 50 億語を収録するタグ付き書き言葉共時コーパスである。ABM は Vladimír Benko によって作成された、現時点でおよそ 1500 万語を収録するタグ付きウェブコーパスである。

<sup>4</sup> 限定所有表現を伴う名詞は残留関係節との共起傾向が、každý “every” や všechen “all” を伴う名詞は非残留関係節との共起傾向が示唆されており、最上級を伴う名詞は常に非残留関係節をとる (Čech and Šimík 2005)。よって、これらの限定表現が共起する用例は除外する。

<sup>5</sup> 女性・中性人間名詞の用例を抽出する際は、コーパス内で出現頻度の高い人間名詞を主要部名詞の lemma に指定し検索を行う。女性名詞と中性名詞は有生性による文法カテゴリーの区別がない(注1参照)ため、lemma の指定なしでは人間名詞の用例を効率良く収集できないことがその理由である。

## 5. 調査

### 5.1. 調査結果

以下に、調査の結果を示す (表 2, 小数第 2 位を四捨五入)。残留割合は、データ全体で **20.7%**、有生名詞で **42.7%**、無生名詞で **2.7%** となった。表中の数値は残留 : 非残留の用例数を、括弧内の数値は当該項目における残留関係節の割合を表す。表 2 内の太字は、当該項目における残留関係節の割合が全体の残留割合のおよその平均である 20% 以上であることを表す。

表 2: 調査結果データ (計 871 例、うち残留 180 例、全体の残留割合 20.7%)

主関格 数	合致		非合致		合計
	SG	PL	SG	PL	
MA	<b>32:8 (80.0%)</b>	<b>8:32 (20.0%)</b>	<b>39:1 (97.5%)</b>	<b>14:26 (35.0%)</b>	<b>93:67 (58.1%)</b>
FA	<b>17:23 (42.5%)</b>	<b>9:26 (25.7%)</b>	<b>27:13 (67.5%)</b>	<b>8:32 (20.0%)</b>	<b>61:94 (39.4%)</b>
NA	2:14 (12.5%)	<b>1:3 (25.0%)</b>	6:34 (15.0%)	<b>4:12 (25.0%)</b>	13:63 (17.1%)
MI	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	4:36 (10.0%)	1:39 (2.5%)	5:155 (3.1%)
FI	1:39 (2.5%)	3:37 (7.5%)	2:38 (5.0%)	1:39 (2.5%)	7:153 (4.4%)
NI	1:39 (2.5%)	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	0:40 (0.0%)	1:159 (0.6%)

最も残留割合が高いグループは **M.A.SG.非合致** (3) となった。一方、無生名詞 (4) における残留はほとんど観察されなかった。

(3) to je děvkař, [co ho ženský milujou.]  
 DEM be.PRS.3SG womanizer.MA.SG.NOM CO M.3SG.ACC.CLT woman.F.PL.NOM love.PRS.3PL  
 「彼は女たちに愛される女たらしだ。」 (SYN11; Fermata; 散文)

(4) Čekal jsem, že dostanu dopis, [co mi  
 wait.PST.M.SG AUX.1SG that receive.PRS.1SG letter.MI.SG.ACC CO 1SG.DAT.CLT  
 Xenka poslala expres].  
 PN.NOM send.PST.F.SG by\_express  
 「私は Xenka が速達で送ってくれた手紙を受け取ることを期待していた。」  
 (SYN11; Jak se dělá chlapec; 散文)

### 5.2. 条件間の序列に関する考察

表 2 のデータに基づき、有生名詞を残留割合の高いグループから順に並べると、次のようになる。用例数が 4 例のみであった N.A.PL.合致は考慮しないこととする。

① **M.SG.非合致** (97.5%) > ② **M.SG.合致** (80.0%) > ③ **F.SG.非合致** (67.5%) > ④ **F.SG.合致** (42.5%) >  
 ⑤ **M.PL.非合致** (35.0%) > ⑥ **F.PL.合致** (25.7%) > ⑦ **N.PL.非合致** (25.0%) > ⑧ **M.PL.合致** (20.0%) =  
 ⑨ **F.PL.非合致** (20.0%) > ⑩ **N.SG.非合致** (15.0%) > ⑪ **N.SG.合致** (12.5%)

これらの残留割合の降順から、次のことが言える。

① **有生性**によって残留代名詞の有無が決まる。基本的に無生物では残留せず、特定の条件の働きは観察されない。

以下、有生名詞において、諸条件が次の順に強く働く。

②主・対格形が働く。主・対格形が非同一である名詞は残留割合がより高くなる (網掛け)。

↓

③数が働く。[②主・対格形非同一] の条件を満たす名詞の中では、単数の場合に残留割合がより高くなる (太字)。

↓

④性が働く。[②主・対格形非同一、③単数] の条件を満たす名詞の中では、特に男性名詞で残留割合がより高くなる (波線)。

↓

⑤主関格が働く。[②主・対格形非同一、③単数、④男性] の条件を満たす名詞の中では、主関格が合致していない場合に残留割合がより高くなる (斜字)。なお、主関格非合致による残留割合増加の傾向は、[②主・対格形非同一] の条件を満たしていれば、数、性を問わず観察される。

これらの条件の働き方は、次のように図式化することができる (図 2)。残留割合が最も高くなるのは、**男性有生名詞単数かつ主関格が非合致**のグループである。一方、有生名詞の中では、主・対格形が同一であるグループ (中性名詞、女性複数名詞) で比較的残留割合が低くなる。

本研究では、チェコ語の代名詞残留に関して新たに次のことを主張する。

#### 【条件全体の働き方に関して】

1) 5つの条件は、**有生性>主・対格形>数>性>主関格**、の順に強く働く。原則として、有生性によって残留代名詞の有無が決定する。基本的に無生名詞は非残留関係節をとる一方、有生名詞では様々な条件の組み合わせにより残留割合に差が生じる。

#### 【個々の条件の働き方に関して】

2) スラヴ諸語全般において働くとされる主・対格形はチェコ語においても観察され、主・対格形は主関格より優先的に働く。

3) Čech and Šimík (2005) は、残留関係節の割合が特に男性活動体名詞と女性名詞で高くなる理由を、「人間の指示対象は主にこれらの名詞によって表されるためである」としている。一方、調査結果から、人間を表す中性名詞は主・対格形が常に同一であるため、人間を表す名詞の中では残留割合が比較的低下するこ

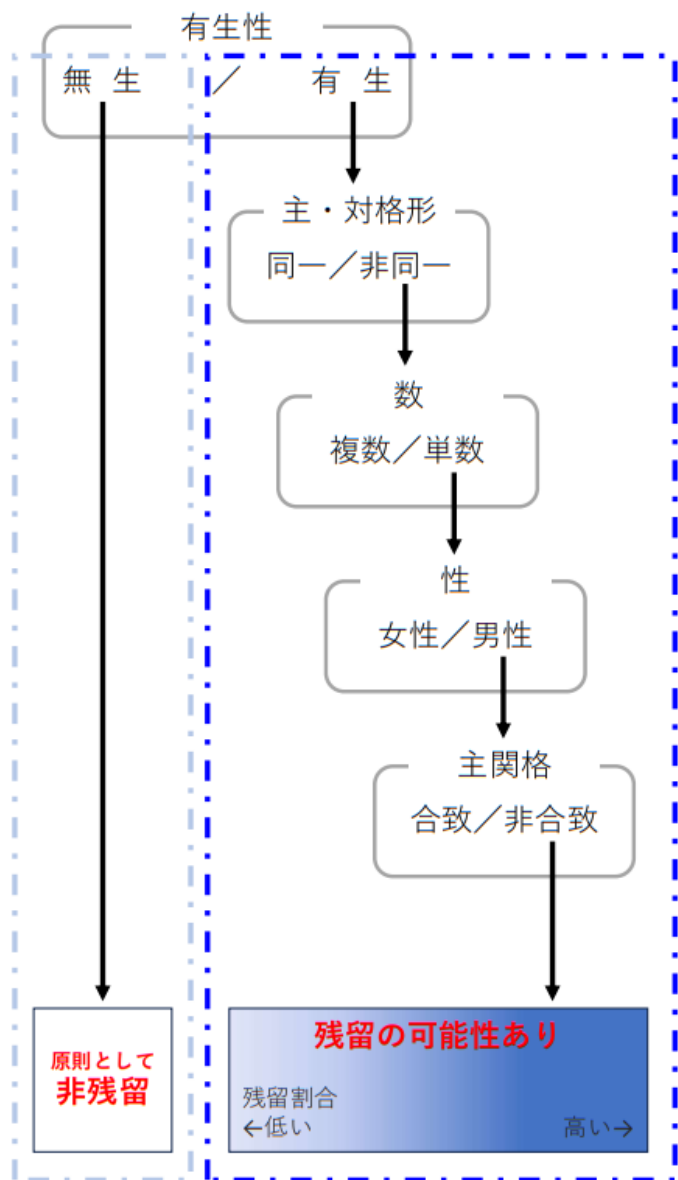


図2: コーパス調査に基づく5つの条件の働き方

とが明らかになった。Čech and Šimík (2005) の記述は、「人間を表す名詞の中では主・対格形を異にする男性活動体名詞と女性名詞で残留がより起きやすい」のように精緻化できる。ただし、男性活動体名詞で特に残留割合が高くなる理由は不明である。

4) 「残留関係節は有生性に関わらず単数名詞と共起しやすい」(Fried 2010) という主張は、「有生名詞においては特に単数で残留割合が高くなる」のように修正できる。

5) 主関格は、序列のより上位にある数・性の如何に関わらず効力を発揮することから、残留割合を高める働きはそれほど強くないものの、比較的広範に働く条件であると言える。

### 5.3. 個々の用例の分析

有生名詞の用例うち、関係節内の主語が無生物でありかつ無生物主語が普通名詞や指示代名詞、節によって明示されているものは5例見つかり、全て残留が起きていた。以下に挙げる例では、関係節内の主語はそれぞれ名詞「頭」(5)、指示代名詞「それ (= 駐車違反切符を切ったり騒がしいパーティーを追い散らしたりすること)」(6)、接続詞 *že* に導かれる節「私が何かを書いているということ」(7) となっている。このように、**無生物主語と人間目的語という通言語的に非典型的な組み合わせ** (Aissen 2003) の場合、関係節内の文法関係を明示する必要性が高まり、残留代名詞が現れやすくなるのではないかと考える。

- (5) {Většina z nás ještě dovede pochopit, že} muž hledá potěšení  
 husband.MA.SG.NOM look\_for.PRS.3SG pleasure.N.SG.ACC  
 jinde, když má doma vzteklou semetricku nebo manželku,  
 elsewhere when have.PRS.3SG at\_home angry shrew.F.SG.ACC or wife.F.SG.ACC  
 [co ji pořád bolí hlava].  
 CO F.3SG.ACC always ache.PRS.3SG head.F.SG.NOM

「家に怒った口やかましい女やいつも頭が痛い妻が居る時、夫は他の場所で喜びを探す{ということ、我々の多くはまだ理解できる}。」 (ABM; ona.idnes.cz; 2013-05-29)

- (6) {Snaží se představit si ho v uniformě, jak vypisuje pokuty za parkování a rozhání hlučné večírky.}

“Znám lidi, [co je to baví,  
 know.PRS.1SG people.MA.PL.ACC CO 3PL.ACC DEM amuse.PRS.3SG  
 dělají to dobře a už u toho zůstanou.] (...)”  
 do.PRS.3PL DEM well and already by DEM stay.PRS.3PL

「{彼が制服を着て駐車違反切符を切ったり騒がしいパーティーを追い散らしたりするのを想像しようとする。}『私はそれを楽しみ、上手くやり、そのような仕事に残り続ける人々を知っています。』」 (SYN11; Oční kontakt; 散文)

- (7) Holky, [co je zaujalo, že píšu], si  
 girl.F.PL.NOM CO 3PL.ACC interest.PST.N.SG that write.PRS.1SG REF.DAT.CLT  
 chtěly hlavně povídat.  
 want.PST.F.PL mostly talk.INF

「私が何か書いているということに興味をそそられた女の子たちは、多くの場合、私とおしゃべりがしたいだけでした。」 (SYN11; Respekt NEW; 週刊誌)

## 6. 結論

本研究では次のことを主張する: チェコ語の残留代名詞は、1) 一般的に目的語になることが典型的でない有生名詞において、形態的に有標な対格形、指示可能性・個別性の度合いの高さ、主関格の非合致を標示する働きがある。加えて、2) 主要部名詞と関係節における主語が、有生物目的語と無生物主語という非典型的な組み合わせとなっている場合、関係節内の文法関係を明示する働きを持ち合わせる。

本研究は、チェコ語の代名詞残留に影響を与える条件の階層的記述により、通スラヴ語的・通言語的な関係節の研究に貢献するものである。今後の課題としては、代名詞残留に影響を与える条件のスラヴ語間対照研究や、スラヴ諸語における代名詞残留の通時的研究が挙げられる。

## 略号一覧

1 1 人称 / 3 3 人称 / A 有生 / ACC 対格 / AUX 補助動詞 / CO 関係節を導くチェコ語の疑問代名詞 / CLT 前接形 / DAT 与格 / DEM 指示代名詞 / F 女性 / I 無生 / INF 不定形 / LOC 前置格 / M 男性 / MA 男性活動体 / MI 男性不活動体 / N 中性 / NOM 主格 / PN 固有名詞 / PL 複数 / PRS 現在 / PST 過去 / SG 単数

## 参考文献

- 王路明・ブラシャント パルデシ・堀江薫 (2005) 「中核 (core) から周辺 (periphery) まで—英語、日本語、中国語、アジュクル語、マラーティー語の関係節形成—」『言語処理学会年次大会発表論文集』11: 839-842.
- Aissen, Judith (2003) Differential object marking: Iconicity vs. economy. *Natural language & linguistic theory* 21 (3): 435-483.
- Čech, Radek and Radek Šimík (2005) Distribuce plných a prázdných akuzativních resumptiv: korpusová analýza. In: Linda Awadová et al. (eds.) *Sborník ze setkání bohemistů Cikháj 2005*, 19-24. Brno: Masarykova univerzita v Brně.
- Fried, Mirjam (2010) Accusative resumptive pronoun in the Czech relative clauses with absolutive relativizer *co*. *Korpus-gramatika-axiologie* 1: 16-29.
- Hladnik, Marko (2015) *Mind the gap: Resumption in Slavic relative clauses*. Utrecht: LOT.
- Mendoza, Imke (2019) Relative Particles and Resumptive Pronouns in Slavic. *Zeitschrift für Slavische Philologie* 75 (1): 5-42.
- Philip, Minlos (2012) Slavic relative *čto / co*: between pronouns and conjunctions. *Slověne = Словѣне. International Journal of Slavic Studies* 1 (1): 74-91.
- Short, David (1993) Czech. In: Bernard Comrie and Greville G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages*, 455-532. New York: Routledge.
- Šimík, Radek (2008) Specificity in Czech Relative Clauses. In: Jacek Witkoś and Gisbert Fanselow (ed.) *Elements of Slavic and Germanic Grammars: A Comparative View*, 177-198. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Toman, Jindřich (1998) A discussion of resumptives in Colloquial Czech. *Formal Approaches to Slavic Linguistics* 6: 303-318.

## 調査資料

- Benko, Vladimír. Araneum Bohemicum Maximum, verze 15.04. Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha 2015. <https://www.korpus.cz/> [2024年5月16日アクセス].
- Český národní korpus. Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha. <https://www.korpus.cz/> [2024年5月16日アクセス].